

【熊本県賞】

みずを知り、みずからを見つめて

熊本県

阿蘇市立阿蘇中学校

三年

甲斐

爽歌

朝起きてトイレに行く。顔を洗う。ご飯を食べる。歯を磨く。喉が渴いたら水を飲む。食器を洗い、お風呂に入る。水と関わらない日などないし、一日は水にはじまり水に終わるといつても過言ではないと思う。それが私にとって「当たり前」の生活で、水は貴重で大切だ、という考えを日常生活で意識したことがなかった。それを伝えると父は、

「今ある当たり前は、阿蘇が水に恵まれているから成り立っているんだよ。世界の水問題について調べたら、それがよく分かる。」と言った。その言葉を聞き、インターネットを使って自分なりに調べてみると、世界各地で起こる、水をめぐる様々な問題が見えてきた。その中でも特に、アフリカの子供たちの生活と水との関わりに大きな衝撃を受けた。

「子供が毎日水汲みに行く」

アフリカでは水道はおろか、井戸の水もない場所が多く、子供が毎日水を汲みに行くらしい。水汲みのために歩く距離は平均して六キロメートル。重いバケツを持ち、三時間から六時間かけて険しい道を歩く。一回で手に入る水は少なく、一日何回も往復するそうだ。

「子供たちの学習の機会を奪う」

水汲みにかかる時間が、子供たちの学習の機会を奪う大きな要因の一つになっている。子供の頃に教育を受けられず、安定した職につけない人が多くいるそうだ。

「手に入るのは泥水」

どれだけ時間をかけて水汲みに行っても、きれいな水は手に入らない。変な臭いのする水や泥水を飲料水として使って病気になる、一日八百人以上の乳幼児が命を落としているという。

調べてみて、水は生活と深く結びついているからこそ、私たちの生活に大きな影響を及ぼすことが分かった。私は水のたくさんある阿蘇に生まれてきたから、今豊かな生活を送れているけれど、水がないだけで生活の質は大きく変わってしまうことに、今更ながら気付かされた。そして、自分と同じぐらいの子供の置かれる状況を知り、自分が今までどれだけ水を無駄遣いしていたかを考えて、いたたまれない気持ちになった。

そこで、水資源を守り、全ての人が水を安全に使えるために私は何をすればいいのか、考えてみた。一つ目は「知る」こと。今まで見てこなかったものに目を向けると、今ある課題が見つかる。私はお風呂のときシャワーの水を出しっぱなしにしていたり、手を洗ったり食器洗いをするときに出しすぎていることに気がついた。二つ目は「自分を変える」こと。水を無駄遣いしないためにはどうするか、考えて行動に移すことだ。私はまず手を洗ったりシャワーをするときに水を出しっぱなしにしないこと、出す水の量を減らすことから始めていきたい。三つ目は「支援する」こと。学校でも、一年に何回かユニセフ募金活動が行われている。これに募金することでアフリカなどの子供たちに安全な水を届けることができる。自分たちの行けない場所にも思いが届く、素敵な取り組みだと思う。私はあまり募金をしたことがなかったから、少ない額からでも募金していきたいと思う。

今、水不足は全世界が抱える深刻な問題となっている。一人で世界を変えることはできないけれど、自分の中に常に水を大切にする意識があれば、必然的に行動が変わっていく。そのような一人一人の小さな行動が、世界を動かす力になるのだ。そんな一人に私はなる。